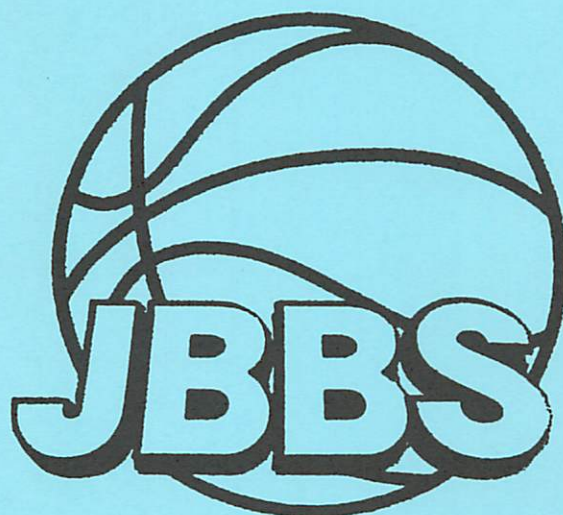


バスケットボールプラザ

Basketball Plaza

No:28



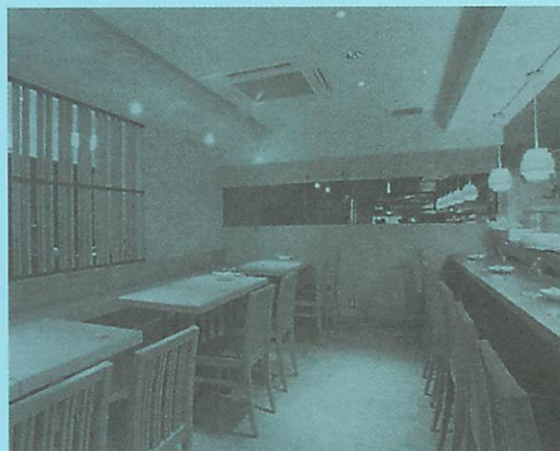
2005年12月

日本バスケットボール振興会

ハ詩 (はちうた)
BISTRO-HACHI-UTA

BISTRO 八詩

渋谷の喧騒を忘れそうな和める空間で、旬の素材を。



ごまや

BISTRO ごまや

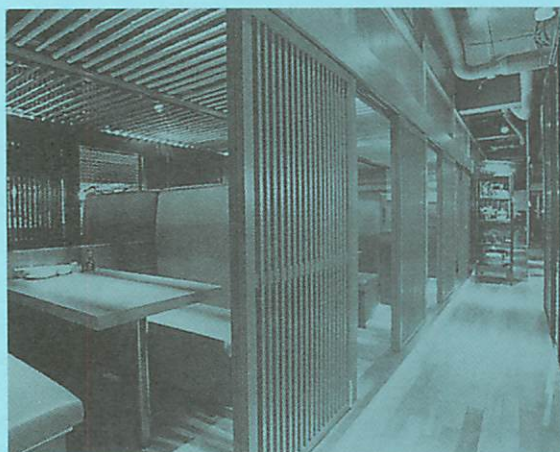
渋谷の真ん中と思えない、まるで大人の隠れ家。



ごまや

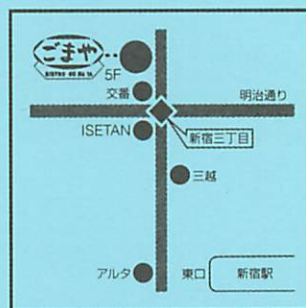
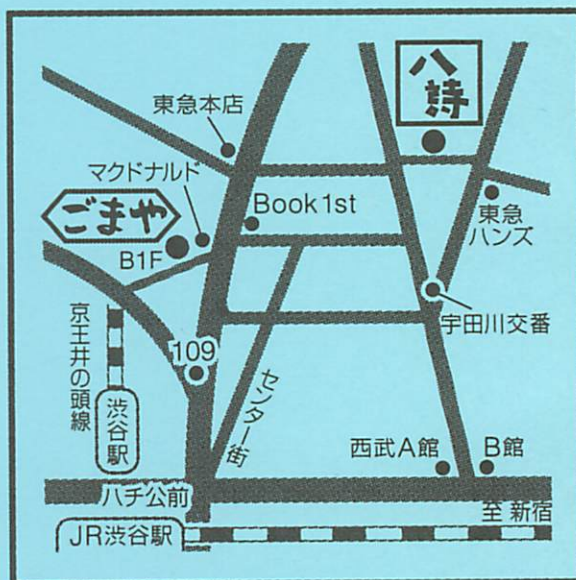
BISTRO ごまや・新宿店

素材にこだわった料理とひとときを、和みの空間で。



おすすめメニュー

手造り胡麻豆腐
季節の野菜で胡麻よこし
豚肉ニンニク味噌巻き
生タコの青のり揚げ
ピリッと胡麻の葉炒飯
生ウニたっぷりスパゲッティー



東京都新宿区新宿3-4-1
カルムビル5F
tel:03-5269-8158
Open 11:30 ~ Last Order 22:45
"年中無休" (120席(個室大小12部屋))

JACKPOT GROUP OFFICE ジャックポットグループ・オフィス
〒155-0032 東京都世田谷区代沢5-35-8 岩瀬ビル1F
TEL 03-3413-9555 / FAX 03-3412-7332 www.jack-pot.co.jp

目 次

○ ご挨拶	会長 愛知 和男	3
○ 特集		
新潟高女時代の思い出	歴史編集プロジェクト	4
指導者、故吉井四郎氏の足跡 その2		
東京オリンピックヘッドコーチ	歴史編集プロジェクト	9
指導者、故吉井四郎氏の足跡 その3		
○ わが軌跡		
転 機	諸山 文彦	16
○ 会員だより		
あしあと	吉澤 徹	19
思い出	荒井 強平	21
バスケットボールは私のベターハーフ	水原 紀子	24
○ 臨時総会報告	広報部会	26
○ 訃報・追悼文		
保坂陽一さんの思い出	小笠原義昭	31
私の先輩ミーコさん	吉田 公子	32
○ 日本バスケットボール協会平成18年度競技日程		34
○ 事務局だより		35
○ プラザ こぼればなし		36

特 集

新潟高女時代の思い出

指導者、故吉井四郎氏の足跡 その2

担当：歴史編集プロジェクト

はじめに

前号に引き続き、指導者、故吉井四郎氏の足跡をまとめお送りいたします。今回は吉井氏が昭和24年(1949)から27年まで体育教師として赴任し、バスケットボール部を指導した新潟高女時代にスポットを当て、当時の教え子の皆さんにお集まりいただき、その頃を振り返っていただきました。

出席者 新潟高女(現新潟中央高校)バスケットボール部卒業生

高野洋子氏 田辺寿美氏
堀 まさ子氏 水原紀子氏

振興会

手嶋 昇氏 阿部 進氏
従野明宏氏 深尾秀次氏
司 会
上谷富彦氏



吉井四郎氏新潟時代のバスケットボール歴

7人兄弟の末っ子として新潟で生れる。昭和11年(1936)ベルリンオリンピックに出場した2歳年上の兄、清三郎が師であり目標でもあった。結核で倒れたこの兄から「バスケットを頼む」と病床にて託されたという。

小学校4年からバスケットをはじめ新潟商業、新潟師範、東京高等師範(現筑波大)でプレイ。ポジションはガード、戦争から復員後、新潟高女(現新潟中央高校)の体育教師として赴任、新潟県バスケットボール協会の復活に力を注ぐ。戦後復活第1回、昭和22年(1947)東京で開催された、第22回全日本選手権で新潟倶楽部優勝メンバーとして活躍、翌年東京で開催された第23回選手権で新潟倶楽部は3位(神戸学士倶楽部優勝)、続く昭和24年(1949)は新潟市で開催されたが、吉井先生はこの大会の新潟誘致に尽力。新潟高女には八谷さん(文理・現筑波OBで 東洋高压チームリーダーとしてNKKの連勝を阻止)から引き継いで3年間体育教師。新潟での各種主要ゲームでは審判もされた。ハワイチーム来日時、芝スポーツセンターで開催された東京大会では全日本チームメンバーの一人。

なお、新潟高女は、戦前に全日本選手権(一般の部)で優勝などを重ね、戦後も新潟県代表を新潟高校と争った伝統校。

司 会 新潟にはバスケットボールの土壌があるのは有名ですが、戦前の時代に女性が

スポーツをするのは大変なことだったと思います。バスケットはモダンなスポーツですが、皆さんはどんな動機でバスケットを始められたのでしょうか？

水原氏 私は、体育の授業でバスケットの種目があり、面白そうだと思っていましたが、バスケット部へは先輩に誘われて入ったと思います。

田辺氏



私は、最初バレー部に入ったのですが、ものすごく部員が大勢いて、「バスケット部なら空いているよ」と言われてバスケット部に入りました。

私の叔母が戦前箒球部の選手で、全国優勝したという話や、当時の新潟高女のバスケットが女学校、中学校、商業の各部門で全国優勝したという話も聞いていましたので。

司 会 皆さんがバスケットをやられていた頃の体育館とか、道具とか、施設はどうでしたか？それに靴とか？

水原氏 先輩たちが強かったからか学校に体育館が二つあり、片方の体育館をバスケット部が専用できました。しかし冬は窓から雪が入るし、天井が低くてミドルシュートは天井の梁を越したシュートでした。靴は無かったから皆さん苦労したと思います。

田辺氏 私は革靴屋さんでバスケット用の靴を作ってもらいました。手作りの革製で軍靴のようなものを特別作ってもらいましたが底が革でしたのですべるのです。

高野氏 私たちが最初にバスケットシューズをはいた学年と思います。靴は当時600円位だったと思いますが、1ヶ月で穴が開いてしまいました。ゴムが悪かったですネ。

司 会 吉井さんが教職に就かれた時の最初の印象はどうでしたか？

高野氏 吉井先生は私たちが何か言うと、可笑しがって上を向いてクスクスと笑う。

水原氏 先生はよくお話しをして下さいましたね。昼休みに「お前ら来い」といわれて、兄の精三郎さんの書かれた本を持って来て、グラウンドの芝生でバスケットの話をされました。私たちもバスケットにのめりこんだつもりで聞きました。話すことと、書かれることが熱心でしたし、毎日の練習も全て書いてこられました。

司 会 吉井さんに怒鳴られたことは1回もないという話が前回ありましたが・・・。

水原氏 「おめーさん達何やってんだデー」と新潟弁で言われるぐらいで・・・。「だめだねっかデー」とも言われました。(笑い)

阿部氏 先生は新潟弁丸出しでしたね。ご自分のゲームの時もガードポジションで「返せー返せーテバ！」としょっちゅう叫んでおられた思い出があります。(笑い)

従野氏 吉井さんのおっしゃったことで、「普段の練習を一生懸命やっていることは神様が見ている。だから頑張っていれば神様は必ず見放さない。」という言葉がありますが、私は今でもこの表現を使わせてもらっています。

高野氏 バスケットの神様の話はよく仰ってました。私もこの言葉が忘れられなくて、昔中学の先生をしたことがあります。その時バスケットの選手に神様の話をさせて頂きました。お陰さまで郡大会で優勝しました。

バスケットの練習も他所と違う練習をなさったと思います。私は左利きではないのですが、左手を使いなさいと厳しく言



われました。フリースローの練習では100本投げて99本入ったと思いますが、そこまでやらされました。先生からご褒美にメダルを頂いたことがあります。それを今日お持ちしようと思いましたが見つかりませんでした。

阿部氏 学級主任としての先生の思い出は？

堀氏



私が中学3年生の時、先生が学校にいらして2年目だったと思うのです。その時クラス主任ですごく人望がありました。そのころ先生が結婚なさいました。当時は田舎の新潟ですから家で式を挙げられ、住まいは西堀通りでした。お嫁さんと一緒に、ご近所に挨拶に回るのにクラスの30人以上がぞろぞろとくっついて回りました。(笑い) 先生はそのくらい人望がありました。

水原氏 九州国体の試合の1ヶ月くらい前だったのですが、結婚式の日には当然練習に来られないと思っていましたのに、結婚式の羽織袴のまま練習に来られたことを思い出します。練習時間は決まっていたので、きっと着替える時間がなかったのだと思います。

司会 その時女性として奥さんはどんな気持ちだったんでしょうネ？

従野氏 奥さんが立派なのです。我々が家に押しかけてもいやな顔をなさらず、よく集まりましたね。

水原氏 家でも温厚ですが、たった一度だけ喧嘩されて、奥様が家を出られたことがありました。後で先生から聞いたのですが、奥様がお子さんを連れて新潟に帰ろうとして上野に行かれたらしいのです。でも奥様が出て行くとしたら新潟しかないと思い、先生は追っかけて行かれて、「俺、追っかけて行ってナ、帰ってきてくれ」と頼んで帰ってきてもらったと、後の酒のみ話でそんなことを言っておられました。(笑い)

司会 吉井さんから聞いた言葉で記憶に残っているのは？

堀氏 個人個人の特徴を良く捉えて指導されました。本人は気がつかなくても、君は足腰が強いんだからとか、それぞれ特徴を生かすようにしておられました。

従野氏 吉井さんはよく我々におっしゃいましたが「選手はモルモットだ、自分で考えたことをやってみてその中から次を考えるのだ」と。もう一つは「選手が自分に教えてくれる、選手が良いプレイをやったとき、どうしてそれがうまくいったかを理論的に裏付けることだ」と。丁度皆さん方を教えているときは、一生懸命に試しているときだったと思います。

水原氏 先生には技術だけでなく別の面でもお世話になりました。

当時、周りからは、「女だてらに運動ばかり夢中になってやってるんじゃないよ」と言われる時代でした。365日バスケットですから、日曜日はどうやって親の目を盗んで抜け出そうかという感じでした。皆がそういう苦勞をしていたと思いますが、中には親に怒られて練習や試合に出してもらえない家庭もありました。そういう家庭には吉井先生が親のところへ頭を下げに行くんです。親が酒飲みなら一緒に酒を飲んで説明し、とにかくバスケットをやらせて欲しいとお願いするのです。そういうことを何人かの方々に本当によくおやりになりました。



九州の国体の時に、メンバーに入っていた人で、いつも試合に行く前になると親に反対されて……。国体は県の代表なので是非出して欲しいと、前の晩から出発間際まで話し合い、一時は許可を得られたので私たちもホッとしていたら、出発の時間になって結局来られなかった。

先生はそういうこともあきらめてしまわれずに、最後まで誠意を尽くされました。心を尽くして話し合えば判ってもらえるという、先生の信念があったからこそ、ぎりぎりまで話し合われたのだと思います。

高野氏 先生は人間らしいいい方でしたよネ。私たちが伊豆の松崎に子供を連れて行ったことがあるのです。私たちが皆遊んでいたら、先生が私たちの子供を全部集めて海へ連れてって遊ばしてくれました。そういう先生でしたよ。私たちの子供を孫みたいに可愛がってくれてね。

司 会 先生に実際に薫陶を受けた方の言葉は大事だと思いますが、自分が覚えている吉井先生の思い出をお願いします。

田辺氏 私はほんの短い期間でしたが、合宿の時に「女の子だと難しいな」という言葉をしみじみ言われたのを思い出します。

水原氏 先生というのとお兄さんというのと公私一体になっている感じ、長い人生の中でバスケットボールをやった期間はほんのちょっとなんですけど、吉井先生のバスケットは欠かせないものになっています。ですからこういう会（振興会）があることはすごく嬉しく思います。先生の思い出の中で特にというのはないんですけど、先生の命日の日は、ああ今日だと思い出します。奥様とも電話でもう何年たちましたネなどと話しますし、身内の様な気持ちです。私の人生にすごい影響を与えてくれた方です。

わからないうちに植えつけられているものがあると思いますね。その気持は自分の子供たちにも、知らず知らずのうちに植え付けているのではないかということが大いにあると思います。

堀 氏 具体的にどうということはありますが、こうやって考えてみると、私の人生で吉井先生の教えというものがどこかでバックボーンになっ

てような……。何かあると皆で集まって吉井さんという親父を偲びます。

従野氏 吉井先生は何しろ新鮮でした。私が一番長く付き合っていたと思っていますが、吉井先生がこうだといわれたら絶対こうでないといけない。否定してやっつけてやろうと思って試みてもやり込められてしまいました。

水原氏 先生はすごく勉強家でしたね、孫子の兵法の様な色々の愛読書があり、バスケットに適用されていました。技術でなくハートなんですよネ。



従野氏 精神論をぶつ人がよくいますけど、あの先生はそうではなかったですね。

田辺氏 先生は何でも理詰めでやるんですよ。私は1年生のころ勉強がすぐ面倒くさくなる、そうすると「女はだめだー」ということになるんです。そしてこっちがわかるまで説明されるのです。そこまではわかるがその先が分からないと言うと、延々と説明が続くのです。「はい、はい」と言うのですが「判ったかなー」とおっしゃる。

手嶋氏 最近、日本の指導者に吉井先生のようなフィロソフィーを持っている人が生れてこないし、また、作ろうとしないように思えます。

阿部氏 バスケットには、指導者の問題が一番原点にあると思うのです。バスケットの技術だけを教えるのではなく、やっぱり惹きつけるものを持ち、心を伝えてバスケットを教える、強くなることは勿論目標ですが、それ以上のことも指導者の原点として必要なのではないかと思います。

小さい子供、高校、大学、それぞれのレベルでバスケットによる感動を

いかにして受け継いでいくか、この感動の体験が後になっても人生のバックボーンとして残っていく、勝つためにベストを尽くして感動を覚え、その結果が見る人にも感動を与えるのではないのでしょうか。

従野氏 47年間教師をやって経験として感ずることは、指導者は感動を与えられなければだめということです。

手嶋氏 お忙しい中ありがとうございました。バスケットの指導者のルーツを見るようなお話を伺いました。次の全日本グループの座談会とあわせて、本物の指導者像を浮き彫りにして行きたいと思います。



以 上

特 集

—— 東京オリンピックヘッドコーチ ——

指導者、故吉井四郎氏の足跡 その3

担当：歴史編集プロジェクト

東京オリンピック

昭和39年(1964)東京で待望のオリンピックが開催された。バスケットボール専用体育館として、代々木第2体育館が建設され、出場した男子日本チームは世界の強豪チームを相手に善戦し、16チーム中10位という成績を残した。この影には代表選手の努力もさることながら、代表チームをここまで鍛え上げたヘッドコーチ吉井四郎氏の功績があったことを忘れてはならない。

今回は、東京オリンピックに日本代表として出場された方々にお集まりいただき、当時の吉井四郎氏の指導について振り返っていただいた。

出席者 東京オリンピック日本代表選手

海保宣生氏 木内貴史氏 中村邦彦氏 諸山文彦氏 若林 薫氏
(旧姓増田)

振興会

手嶋 昇氏 従野明宏氏 上谷富彦氏 桑原 信氏 深尾秀次氏

司 会

島本和彦氏

司 会 本日はお集まりいただきありがとうございます。東京オリンピック代表メンバーのうち5人の方にお出でいただきました。早速ですが、東京オリンピックのときはどんな思いだったのでしょうか？

諸山氏 まさかオリンピックに出られるとは思っていませんでした。私は昭和37年に



三重県の片田舎から出てきたのですが、幸いなことにすぐナショナルチームに入れていただきました。吉井さんの指導は練習メニューがたくさんありまして、私にとってはどれも新しいものでした。中でも一番思い出すのは、ドリブルの1対1や、ボールキープの1対1や2対2といったキツイ練習ばかりだったことです。今思ってみると、そのとき基礎練習に徹底的に取り組んだことが、そのあと身についたことを大変

感謝しています。非常にいいときに、いい指導者のもとでやらせていただけたと思っています。

若林氏 僕は、大学でも先生の指導を受けていたので、代表の合宿でビックリするようなことはありませんでした。先生の特徴は、ただの理論じゃなくて数字で裏付けてくるようなところにあると思います。ローマオリンピックのとき、資料は少な

かったのですが、対戦相手のリバウンドを誰が取るのか計数的に分析して、勝つためにはどうすればいいのかを考えていました。そのように分析して組み立ててきたものの積み重ねが、合宿のメニューなどに反映されていたのだと思います。

木内氏 吉井さんはある種の二面性をもっていたのではないかと思います。それは、バスケットボールを科学的に分析して指導されていた面と、もうひとつは素朴性というか、人間の地のままの姿で選手たちに接してくれるということが、選手たちを惹きつけたのだと思います。

中村氏 私は吉井さんに見出されて本当のバスケットを教わりました。東京オリンピックの代表監督に就任されてから、3年計画のデッサンを描かれていたのだと思います。それはまず、どういう方面から選手を集めるかという問題からスタートし、かなり多方面にわたってスカウティングをすることから始めたのだと思います。おかげで、私の大学は強いチームでなかったのに、最終的にメンバーに残れました。その間、ずいぶん色々な選手と練習しました。東京オリンピックのためにどういうバスケットを構築するかという大きなデッサンがあって、それに向かって具体的な戦術や戦略を考えていったのだと思います。



私にとって練習で行われるドリルは初めてのものばかりで、ついていくのが大変でした。でも慣れていくうちに、なにを目指した練習なのか非常に明確に先生が教えてくれるわけです。指導者としてとてもわかりやすく、本当に素晴らしいコーチでした。

また吉井さんのキャラクターは木訥で、まさに典型的な日本人というイメージを持っていました。さらに、戦争に行ったとき機関銃小隊で最前線に行った話を、合宿になるとよくしてくれました。バスケット以外の経験もいろいろ選手たちに伝えてくれ、これが多くの共感と呼んだのだと思います。

吉井さん自身のポイントとしては、アメリカのバークレーでピート・ニューエル氏に会ったことが大変なカルチャーショックになったと思います。ピート氏と吉井さんの、技術的な話し合いや考え方のぶつかり合いは我々も目の当たりにしました。そうしたぶつかり合いが、ピート氏との素晴らしい出会いになった要因のひとつでした。

司 会 海保さんは、オリンピックとその後の住友金属と、吉井さんとの付き合いが長かったと思うのですが？

海保氏 吉井さんの印象は、バスケットプレイヤーとして教わる中味の濃さに目からウ



ロコが落ちるほどでした。自分がやろうとすることを選手に理解させるために、相当な時間を割いたのです。合宿をやる

と毎晩ミーティングです。毎晩ですよ。あとで聞いた話ですが、吉井さんは「バスケットを教えることと、バスケットを研究することがオレの唯一の趣味だ」とおっしゃっていたそうです。自分がやりたいことを選手に理

解させる努力を、とにかく徹底していました。そのおかげで、練習のとき吉井さんがなにを求めているのか選手は理解でき、成果が出たのだと思います。

良く研究していたことを表すエピソードが「デニアル」という言葉です。今では誰でも **denial** という言葉を知っていると思いますが、吉井さんが住友金属でコーチをしている頃には、日本に入ってきていませんでした。先生は自分でアメリカの技術書を読んで勉強して、選手にその動きを求め始めたのです。でも言葉で聞いたわけではなかったので **denial** を「デナイアル」ではなく「デニアル」と発音したのですね。

先生のことはみんな「オヤジ」と呼んでましたよ。練習はとてもキツイものでしたが、みんな慕っていました。試合中に興奮すると選手の名前を間違えて、ベンチに座っている人の名前を呼んだりして（笑）。そんな一面もありましたが、先生は整合性のないことはやりませんでした。選手の選び方についてもそうでしたが、東京オリンピックの時のチームは何年から始まったんですかねえ？

中村氏 日本協会が、吉井さんに託そうという姿勢になったのは、昭和35年(1960)第1回のアジア選手権のときなんだよね。

その後、計画的に3年間で代表チームを強化したというのは、後にも先にも初めてなんじゃないのかな？

海保氏 東京オリンピックと吉井先生を語る上で、それが背景としてあったのだと思うんだよね。協会が上から下まで一丸となって東京オリンピックを成功させようとした。その前にあったリオの世界選手権というのは、東京のための強化の場だったらしいね。

若林氏 昭和36年(1961)から東京オリンピックのメンバーが決まるまでに、80人くらいが候補選手として合宿に出ていたと思います。文句を言いながらも各実業団や学生が協力した成功例でしょうね。

木内氏 吉井さんを語る上で東京オリンピックも重要だけど、もうひとつ功績があると思います。戦後の日本のバスケットボールが国際舞台において、いかにあるべきかという手がかりや切り口を、最初に作ったところにあると思うのです。

中村氏 先ほど出たピート氏との出会いは、そういう伏線があったのかもしれないですね。自分の下のコーチをアメリカに留学させたり、自分が行ったときも何人かのコーチに会ってるんですよ。

上谷氏 もうひとつの布石として、お兄さんの存在があるのではないのでしょうか。お兄さんが残した、アメリカで発行されたバスケットの原書を、女生徒に翻訳させているんですよ。

木内氏 あの方がすごかったのは、自分で蓄積したものをたくさん持っておられたということです。アメリカから何でもかんでも吸収するのではなく、それをベースにして、日本が国際化するために必要なものをきちんと選択できたことが、日本の国際化にとって大きな要因になったのだと思います。

往々にして国際化というと白紙で行って全部吸収してこようとするのですが、吉井さんはきちんと整理できたところにその偉大さがあると思います。



中村氏 ピート氏に教わったときも、吉井さんはずいぶん議論していましたよ。納得いかないことがあると意見を戦わせていましたよね。

若林氏 吉井さんは教育大のときもそうでしたが、オフェンスを構築するのは下手なん

ですよ（笑）。吉井さんの理想は「刺激に対する反応」なんです。ブルズでヘッド



コーチをしていたフィル・ジャクソンがやったようなオフェンスです。コート上のみんなが空いている選手を見つけられて、アシストパスが出せるようなバスケットが理想だったのです。

あとはオフェンスにおけるテンポとリバウンドボールですね。テンポが速くて点の取り合いになったら、絶対に負けてしまうと考えるようになったのです。だから一番効率が良いのは

30秒ルールがあつたら25秒までボールを持って、最後の5秒でノーマークを作ってシュートを狙う作戦でした。

こう言っではなんですが、東京オリンピックの唯一の失敗はそこにあると思います。ディフェンスはびたりとはまることができたのですが、オフェンスは最後まで構築できなかったと思います。

木内氏 オフェンスの構築というのはなかったかもしれないなあ。吉井さんが常に悩み続けていたのは、シュートの確立を高めることでした。フォーメーションやディフェンスのように、練習して構築することができるものに関しては、とても指導がうまかった。

若林氏 事実、自分でも「シューターをつくるのは下手だ」と認めてましたよ。教育大のときは誰でもシュートを決められる状況をつくるということで、いろいろなフォーメーションを考えていました。でも対アメリカとなったとき、テンポの部分でそれが崩れちゃったのです。だから、最後まで悩んでいたのも、「これだ!」というものを作れなかったのでしょうね。

海保氏 時代が時代だけど、カナダに勝ったときは40点台だったものね。

中村氏 ディレイドオフェンスとブロックアウトはものすごく言っておられましたよね。

木内氏 1対1だと体格差がでてしまうので、5人で攻めて5人で守れという作戦から、どうしてもテンポがゆっくりになったんでしょうね。

桑原氏 吉井さんが、5対5で守らなきゃいけないと感じたのは、アジア大会の決勝だったと思います。あのときフィリピンに負けたのですが、リバウンドで負けたんですよ。だから、僕は、吉井さんが悩んでいたのは、ディフェンスの方じゃないかとも思うのですよ。（笑）

木内氏 これは本人に聞かないとわからないことだけど、最初のスタートだったユニバーシアードのチームは、本当に小さい選手ばかりだったのですよ。そういうチームでどこまでやれるか試してみたかったんじゃないのかな。その後も、いろいろなチーム構成をしたのは、そういうところにもあると思いますよ。

中村氏 そういう意味では、吉井さんがやりたいバスケットが実現できる環境を、日本のバスケット界は持っていたんでしょうね。協会も企業も協力的でしたし、国内の合宿なんか本当によくやりました。

桑原氏 東京オリンピックという金科玉条があつたからかもしれませんが、環境は良かったですね。

若林氏 そんな中で、ディフェンスはほぼ完璧だったと思います。ピート・ニューエル氏が入ってきたことで、ポジショニングを徹底的に大切にするようになりました。教育大時代に教わったディフェンスから変わったなと感じたものです。

海保氏 吉井さんが言っていたことだけど、「ヘッドコーチが試行錯誤する間は、チームは絶対に強くならない。その代わりこれだというものが定まったら必ず強くなる」と。東京オリンピックの最後の頃は、ディフェンスは全く迷うことがなかったけどオフェンスで迷っていたかもね。

木内氏 コーチとして一番求められるのは説得力だと思います。良い悪いを教えることじゃなくて、自分が考えていることをいかに相手に理解させるかが大事なことで、あの人は、その説得力が特に秀でていたと思う。どんな方法でもいいけど、自分の考えを相手に伝えられるかどうか、まず第一だと思います。

吉井さんのミーティングは長かったよね（笑）。新人がチームに入ってきたとき戸惑うのは、覚えることのボリュームの多さと質だろうね。それをどうやってコート上で表現すればいいのか汲々としていたんだろうな。

海保氏 もうひとつ、吉井さんはアメリカに1年間行ったのですが、指導者って、自分と同等くらいの力量と思われる人に色々言われるのは嫌がると思うんだよ。

上谷氏 吉井さんから一番感じるのはそこですね。バスケットを愛しているから、力量なんかは関係ないのでしょうね。どんなチームでもバスケットを愛している人がいれば指導に行くし、その度量の大きさはすごいと思いますね。



海保氏 住金でも、合宿は2泊3日が2回くらいあったのですが、ミーティングがすごいんですよ。普段の練習は夜の7時からだから、自分がやりたいことを選手に伝える時間が無いんですね。だから合宿になると待ってましたとばかりにミーティングをするわけです。（笑）そのときはナショナルチームのやり方とは違って、吉井さんではなく、選手の誰かに司会をさせ、選手同士で練習を振り返らせるわけですが、なかには間違った理解をしている選手がいますので、それを全部ノートに取っておいて、選手とのギャップを埋める努力をしていましたね。

木内氏 吉井さんはバスケットボールには神様がいてって言ってましたね。吉井さんがいままで努力してきたことを、神様が必ず見ているということなんじゃないのかな。

海保氏 吉井さんは新潟時代、お兄さんがいなくなったチームで優勝できなかったことが余程悔しかったみたいです。だから、なぜ勝てなかったのか悩みに悩んだらしいのだけど、そのときに勝てなかったのは、神様が試練を与えているのだ、次に勝つための力を与えてくれているのだと思ったようです。そうやってポジティブに考えたんですね。

木内氏 何につけても積極的だったですし、それと必ず努力を認めますよね。努力とい

うものは必ずなにかに跳ね返ってくるのだ。必ず大きいチームにも勝てるんだということを信じていましたよね。

海保氏 吉井さんが住金に来たのはシーズン途中の8月か9月で、来た直後の天皇杯でボロ勝ちしたのです。そのときのメンバーには優秀な選手が揃っていましたから、吉井さんは、テンポの速いゲーム、点の取り合いをやったら絶対に勝てるということで、いきなりハーフコートのプレスをやったのです。そうしたら結果は圧勝でした。

司 会 そのころの吉井先生は、東京オリンピックで問題だったオフENSEをクリアされていたのでしょうか？

海保氏 外国のチームと対戦する日本代表と、日本のなかでも力がある選手が揃った住金では、やることに根本的に違ってましたね。テンポを速くすれば必然的に勝ててしまうわけですから。

中村氏 ボビー・アンダーソン氏が教えたオフENSEは、とても難しかったんですよ。あのころのチャンスメーカーはガードの奈良さんで、あの人は我々がボールが欲しいときに縦にカットインして、その動きがあったときによりやく我々にパスが回ってきました。それは教えられた動きじゃなくて、自然発生的に出てきたオフENSEですね。

海保氏 東京オリンピックで、あと3ヶ月準備期間があればオフENSEの方も充実した戦いができたのかもね。

中村氏 ピート氏はディフェンスの神様と呼ばれたコーチだったでしょ。NCAAのチャンピオンになったときも、ディフェンスで勝っているわけですから。だからディフェンスに関しては、ある程度完成していたわけです。



日本がソビエトに勝った試合も、オールコートプレスがピタッとはまったわけで、戦略にプラスして戦術的なものもあったのでしょうね。

若林氏 吉井さんは国際試合を経験して、リバウンドを獲得することがいかに大切で大変かということを感じたと思うのです。だからオフENSEもディフェンスも、それに集約していったのだと思います。相手が大きい場合1対1だと負けてしましますが、何人でリバウンドに行けばボールを獲得できるのかという研究をよくしていました。リバウンドボールに入りやすいディフェンスを考えていましたよ。

木内氏 吉井さんの集大成は、東京オリンピックの中でもイタリア戦じゃないだろうか。ローマ大会で4位というあの大型チームを破ったのだから。

吉井さんのことばで良く覚えているのは、「お前はシュートが決まるときは、どういうときだ？」と聞かれるのですよ。だから「ボールをもらってゴールをよく見てシュートを打つときです。」と答えたら「違う」と言うのです。「ボールをも

らったときに、すでにシュートが決まるかどうかは決まっている」ということでした。

若林氏　まさにそれが吉井さんの考えだと思います。みんながアシストパスを出せるチーム作りはそういうことでしょう。ボールをもらう人は「ここに行ってボールをもらえばシュートを決められるよ」と思い、パスを出す人もそれを感じてパスを出せと、いうわけですよ。

木内氏　吉井さんは怒ることもあったけど、人間性を否定する怒り方はしなかったですよ。

上谷氏　このシリーズを始めようとしたきっかけもそこにあります。指導者は選手のポテンシャルを引き出してあげることが大事ですよ。

あとがき

紙面の関係で、ここではその一部しかお伝えできないが、東京オリンピックを戦った戦士たちと、たぐいまれな指導者との出会いは本当に素晴らしかったことが想像できる。

この座談会終了後、日本バスケットボールの将来について熱い討論が続いた。サッカーと比較して、バスケット界は指導者の育成が遅れていることは否めない。

しかし一方で、ミニバスや中学の大会を見ると、地方に熱心な若い指導者が存在していることも事実だ。

振興会としては、こうした芽に対して、吉井さんの財産を伝えていくことが大変重要なことであることを痛感させられた。

吉井さんが指導したメンバーとともに、力をあわせて「吉井さんの思い」を次の世代に引き継いでいきたい。

終わり





KIRIN
**amino
supli**

アミノ酸1000mg



The human body needs a constant supply of amino acids to maintain its energy and vitality. Kirin amino supli provides the essential amino acids you need to keep your body in top condition.

amino acid amino acid. By providing your body with amino acids, amino acids become the source of energy for your body. It is also essential for health. Kirin amino supli is the best amino acid supplement.

NEXT STAGE!

NEW!

amino supli!



molten®
For the real game

新・世界基準。



GL7/GL6 | GIUGIARO DESIGN

世界のあらゆるオフィシャルゲームに試合球を提供し続けるモルテン。進化したスタイルとテクノロジーが、次の、未来の、新たな基準となる。

FIBA(国際バスケットボール連盟)公認の公式試合球として、数々の国際試合で採用されているモルテンのバスケットボール。ここに次世代の世界基準となるボールが誕生しました。デザイン開発はイタリアが誇る世界的なインダストリアルデザイナー、ジョルジュエット・ジウジアーロ率いるチームが担当。パネルは従来の8面から12面へと変化。視認性が大幅に向上し、存在感あふれるスタイルになりました。その美しいデザインは、極限まで進化したテクノロジーに

支えられています。カーカス部分(1)全体にクッション性に優れた高発泡ゴムを使用し、シーム周辺部(2)には耐久性とクッション性を兼ね備えている特殊ソフトゴムを使った“デュアル・クッション・テクノロジー”を採用。リバウンドスピードの向上とともに、内圧を従来よりも低く設定できることで、優れたグリップ性、ボールコントロール性、耐久性を同時に確保しました。また、ボール表面のシボ形状(3)を従来よりもフラットな状態にする“モルテンフラッ

トシボ”によって、プレーヤーの手に吸いつくような感覚を高め、究極のコントロール性能を実現。さらにシーム周辺部の段差をなくした“モルテンフルフラットシーム”により、つねに一定のバックスピンをかけることができ、より正確なボールコントロールが可能になりました。これまで培ってきた定評ある技術に、革新的なテクノロジーを融合して世界のスタンダードを創り続けるモルテン。このモデルがバスケットボールの未来を創り、新たな神話を描き始めます。

*1 表皮と補強層との間の部分 *2 パネルとパネルの縫い目 *3 ボール表面の突起パターン